鷹・鷹場・環境　NEWS　2018.10.1

Vol. 05

鷹・鷹場・環境研究会
The Society for Hawks, Hawking Grounds, and Environment Studies

目次

韓国調査報告　丸山大輝

宮内庁鴨場見学参加記　山﨑久登　福田千鶴

編集後記

韓国調査報告

丸山　大輝

開催日：2018 年 9 月 7 日～9 日

はじめに―調査概要－

2018年9月7日（金）から9日（日）にかけて、韓国にて鷹狩文化の調査を実施した。当初、8日に予定されていた日韓学術シンポジウム「東アジアにおける日本の鷹狩文化の成立と展開」が諸般の事情により延期となったこと、また、関西地方を直撃した台風23号の被害をうけ、関西空港が閉鎖されたことから、直前になって出発をとりやめざるをえなかった参加者が出たため、当研究会からの参加者は、福田千鶴（研究代表）・岩淵令治・大坪舞・相馬拓也・中澤克昭・森田喜久男・越坂裕太（連絡調整係）・丸山大輝（記録係）の計8名となった。本調査ではソウルとテジョンの2都市を訪れ、現地での鷹師への聞き取り調査や意見交流、チョウセンオオタカの観察、韓国における伝統的鷹狩文化の普及活動などの調査を行った。

調査初日－国立中央博物館を訪問－

9月7日（金）、福岡空港と成田空港をそれぞれ出発した韓国調査メンバーは仁川国際空港にて合流、空港鉄道 A'REX でソウル市内へと向かった。国立中央博物館を訪問し、日本館に展示されている「狩り」を題材とした近代美術を鑑賞した。オオタカがキジを捕らえた場面を描いた石崎光瑤（1884～1947）の「狩（Hunting）」、タンチョウを背後から捕らえるオオタカの姿とそれを見て飛び立つマガンの群れを描いた前田青邨（1885～1977）の屏風絵「鷹狩（Falconry）」等が展示されていた。これらの作品から、日本の近代を生きた芸術家による「狩り」へのイメージを感じ取る事ができた。

博物館見学後は地下鉄で東大門駅へ移動。周辺の歴史文化公園城壁跡と東大門を巡見し、初日の日程を終えた。

パク・ヨンスン鷹師の高麗鷹房を訪問

日（土）は、午前9：25ソウル発の KTX に乗車、韓国中西部の都市テジョンへ。当地を訪れた第一の目的は、現役の鷹師であるパク・ヨンスン氏との交

写真 1　パク鷹師（中央）との座談会の様子

流を図ることにあった。パク鷹師は大田市無形文化財第8号に登録された鷹狩技能保持者であり、韓国の鷹狩文化の保存とその普及活動にも努めている。韓国の鷹狩は、2010年11月にモンゴル・フランス・ベルギーなど計11ヵ国とともにユネスコ世界無形文化遺産に登録された。パク鷹師は韓国を代表する鷹師であり、無形文化遺産登録運動で中心的役割を担った方でもある。

テジョン駅から車で30分ほど移動し、パク鷹師の運営する高麗鷹房に到着した。パク鷹師夫妻とその弟子のクォン・ジェミョン氏の出迎えをうけ、すぐに座談会が始まった。

まず、パク鷹師から韓国の鷹狩について[1]、日本の鷹狩と比較しながら説明があった。パク鷹師によると、韓国には王族が用いた伝統的な鷹道具や鷹書はほとんど残っておらず、現在伝わっている鷹道具は庶民が用いたものばかりだという。一方、日本では鷹書が多く現存し、主に武士層が用いた伝統的な鷹道具なども、流派ごとの鷹狩技術とともに伝承が続いている。アジアの鷹狩文化の共通性を考えれば、韓国の伝統的な鷹狩文化を復元するうえで、日本の鷹狩文化が参考になるところもあるので、今後は研究面で協力していきたいとのことであった。

パク鷹師は鷹狩の保存を語る上で、現代の韓国と日本における鷹狩の普及の違いについても言及された。韓国では鷹狩を行うための前提として免許制が導入されており、タカを扱うためには政府の定めた試験を合格する必要がある。さらに、鷹狩に用いるタカについて、韓国では野生のタカを捕獲・調教して、鷹狩に用いている。一方、日本では野生のタカの捕獲が禁止されているため、海外からの輸入、もしくは国内で繁殖させてインプリントしたタカを鷹狩に用いる。

このようなパク鷹師の説明から、韓国では鷹狩を保存するための前提として、より多くの人への普及を重要視しているように感じた。

また、日本と韓国の鷹狩の異なる点については、パク鷹師からは狩猟空間の違いを指摘された。韓国では平地で鷹狩は行わず、4～6人で山へ赴き、キジやウサギを狙った鷹狩を行うので、平地を中心に鷹狩を行う日本との大きな違いではないか、ということだった。そこで、韓国では鷹狩でツルやハクチョウなどの大型の水鳥を獲るかどうかを日本側から確認したところ、オオタカは自分より大きい獲物は獲らないとのことだった。この点についても、日本と韓国の鷹狩文化の違いなのかどうか、今後慎重に検討していくことが必要であろう。

写真3　鳥屋の様子

飼育されているタカと鷹道具

高麗鷹房の鳥屋は長屋に6部屋があり、各室の3面を囲って鷹が相互にみえない構造となっていたが、正面は開放されていた。この点は、4面を囲って暗室にできる日本の鳥屋とは異なる構造であった。

鳥屋にはチョウセンオオタカ（2歳、メス）・ハヤブサ（3歳、メス）・チョウゲンボウ（1歳、オス）・ハリスホーク（5歳、オス）の4居が飼育されていた。ハリスホーク以外は、パク鷹師が自ら近隣の山で捕獲したものだという。

チョウセンオオタカ（*Accipiter gentilis schvedowi*）はタカ目タカ科の鳥で、全10 種類の亜種が確認されるオオタカ（*Accipiter gentilis*）の1亜種である[2]。ウラル山脈からアムール地方、中国の東北部と南西部、朝鮮半島に留鳥として分布し、一部は中国南部、インドシナ北部等で越冬する。チョウセンオオタカは日本の固有亜種オオタカ（*Accipiter gentilis fujiyamae*）に最も類似するが、日本のオオタカよりも大きく、全体的に淡色なのが特徴である。そのため、チョウセンオオタカには狩を得意とする名鷹が

[1] 朝鮮半島全体で鷹狩文化の共通性があるが、今回は韓国を調査したことから「韓国の鷹狩」に表記を限定する。

[2] 以下、チョウセンオオタカや日本のオオタカとの識別については、財団法人山階鳥類研究所編「オオタカ識別マニュアル」（環境省自然環境局野生生物課、2008 年）、公共財団法人山階鳥類研究所「オオタカの日本固有亜種とヨーロッパ産亜種との識別に関する調査業務報告書」（環境省自然環境局野生生物課、2015年）を参照している。

多く、朝鮮半島から輸入されたオオタカは、日本の鷹狩文化において重宝されていた。日本の鷹狩を考える上で重要なチョウセンオオタカを実見し、実際にチョウセンオオタカを据えされてもらい、その大きさを体感することができたのは今回の調査における大きな収穫であった。(その他、鷹房で飼育されていたタカについては、表1を参考にしていただきたい。)なお、韓国ではタカの雌雄はそれほど重要ではなく、飛ぶのが速いオスのオオタカでキジを獲り、体の大きなオオタカのメスでウサギを獲るといったように、タカの特性にあわせた狩猟を行っていると聞いた。どちらかといえばメスを重宝する日本との相違点が分かり、興味深かった。

タカの餌について、以前はニワトリやネズミ、イヌの肉を用いていたそうだが、現在はウズラやハト、キジ、ウサギなどを餌にしているそうだ。高麗鷹房の敷地内には、のちにタカの餌となるウズラやウサギが飼育されていた。タカに餌を与える際には太らないように草や木の皮を一緒に与えるそうで、これには満州地方との共通性があるとのことだった。

また、実際に鷹狩で使用する道具類も紹介していただいた。タカを捕獲するための道具(写真3)やスイベル(端長鼓)と呼ばれる韓国独自の道具(写真4)、ウシの皮で作られた三つ指の手袋(左手用)、タカの行方を知らせるシチミと呼ばれる道具(写真5)などである。

チョウセンオオタカ	ハヤブサ
2歳／メス	3歳／メス
獲物：キジ・ウサギ	——
チョウゲンボウ	ハリスホーク
1歳／オス	5歳／オス
獲物：小鳥・ネズミ	狩には使わない、デモンストレーション用

表1　高麗鷹房のタカ

スイベルはタカを据える際に用いる紐(麻製)で、状況に応じた様々な使い方が可能である。シチミ(시치미)とは飼い主の名前などが記載された札のことである。韓国では、タカの尾羽にシチミを付けて鷹狩を行うが、これはタカの所有者を示すためである。パク鷹師のシチミはウシの角で作られ、山で鷹狩する際の目印となるようにハクチョウの羽根と鈴をとりつけていた。また、「シチミを外す(시치미를 떼다)」という慣用句も存在し、「しらを切る、とぼける」という意味で日常的に使用されるそうである。これは、シチミを外すことで他人のタカ

写真3　タカを捕獲する道具(中央)とその使用法を説明するパク鷹師

写真4　スイベル

写真5　シチミ(手元は名前が書いてある札)

写真6　高麗鷹房にて集合写真

を自らの所有物と偽ったことに由来する。韓国の日常生活において、鷹狩文化がいかに根付いているかがうかがえる。

このように、座談会では主に韓国と日本の鷹狩を比較しながら討論を行った。パク鷹師・調査メンバー双方から質問が飛び交い、日韓両国の鷹狩文化について考える貴重な機会となった。

座談会終了後、パク夫妻とともに昼食をとり、午後はテジョンの伝統文化を伝える「テジョン伝統つばさ館」を訪問した。当館はテジョンの伝統文化や生活を紹介する施設で、係員の方から案内を受けながら見学をした。テジョンには鷹狩の他にも木工や藁細工などの伝統工芸、独特な食文化や宗教行事などがあり、テジョンの文化や民俗について理解することができた。

南山ゴル韓屋村にて

最終日（9日）の午前中は、南山ゴル韓屋村へ向かった。南山ゴル韓屋村は、韓国式庭園に伝統家屋を移築して造られた公園で、その一角に常設の鷹狩ブースが設けられている。調査メンバーの到着とともに、ファン・テイン氏が暖かく迎えてくださった。ファン氏はパク鷹師の弟子で、韓屋村を拠点に一般の方々を対象とした鷹狩の普及活動に努めておられる。鷹狩ブースにはチョウセンオオタカとチョウゲンボウが繋がれており、鷹道具の公開や鷹狩に関するポスターが掲示されていた。ここで、観光客や地域の子どもたちを対象とした鷹狩体験を行っているそうだ。タカを実際に飛ばして受け止める渡りの体験には安全性を考慮してチョウゲンボウを用いていた。調査メンバーも実際に体験させていただいた。

写真7　南山ゴル韓屋にてファン氏（一番左側）とともに

ファン氏は、タカに興味を示して近づいてきた子どもたちに「タカは怖くないよ」と積極的に話しかけておられた。韓屋村での体験活動も、子どもたちがタカや鷹狩に興味をもつきっかけになればと始めたことだそうだ。ファン氏との交流からは、伝統的な鷹狩文化を一般の方々に認知してもらい、それを普及・継承につなげていこうとする熱意が伝わってきた。

また、ファン氏は普及活動の傍ら、鷹狩に関する研究も進めているそうだ。「鷹狩文化研究の発展に向けて東アジア全体が協力していく必要がある」と熱く語る姿がとても印象的であった。ファン氏とは今後も情報共有や研究交流を続けていくことを約束し、韓屋村を後にした。

午後は国立古宮博物館を訪問した。当博物館では朝鮮の歴史をたどりながら、動物美術を中心に鑑賞をした。屏風や襖などに多くの動物が描かれていたが、その中でもツルが多く見られた。韓国の歴史において、ツルがいかに重要で、象徴的な動物だったのかを理解することができた。古宮博物館の見学後は隣接する景福宮を訪れ、朝鮮王朝時代の文化を学んだ。景福宮見学後、ソウル駅から空港鉄道で仁川国際空港へ。無事に三日間の調査を終えることができた。

おわりに

今回の調査は、韓国鷹師との交流、鷹狩文化の現状調査を目的に行われた。パク鷹師を中心に、多くの弟子へと伝統的な鷹狩文化が受け継がれ、また、一般への認知度を高め、普及を目的とした活動にも力を入れている姿が印象的であった。今後も韓国の鷹師や研究者の方々と交流を続けていくことで、東アジア地域の鷹狩文化の広がりやその展開について、多くの研究成果を発信していくことができるのではないだろうか。

前述したように、予定されていた日韓鷹狩文化学術交流シンポジウムが延期となり、日程が急遽変更されたにもかかわらず有意義な調査を終えることができた。シンポジウムでの報告を予定していたクォン・ジェミョン氏からはまた、「韓半島最南端南海の島に残るオオタカによる鷹狩」と題する発表用スライドの資料をいただいた。報告を聞けなかったことは残念だが、今後の研究に活用していきたい。

最後に、訪問を快く引き受けていただいたパク・ヨンスン鷹師夫妻、その弟子のクォン・ジェミョン氏とファン・テイン氏、テジョンでの通訳を引き受けてくださったイ・スジョン氏には、この場を借りてお礼を申し上げたい。

宮内庁鴨場見学参加記

埼玉鴨場見学参加記

山﨑　久登

埼玉鴨場は、埼玉県越谷市の元荒川左岸にあり、明治 41 年より皇室の御猟場となった。現在も宮内庁が管理をしており、内外の要人を招いての鴨猟が行われている。約 12 万ヘクタールの広大な敷地の中に、元溜と呼ばれる池や、御泉水、食堂などの諸施設がある。

6月 29 日に実施された見学会は、参加者は 20 数名であった。まず 30 分程度、鴨場についての映像を視聴し、その後宮内庁式部職の方々の案内で鴨場内部を一時間程見学した。

実際に鴨猟を行うときは、囮の家鴨（鴨場で飼育されたもの）を使って鴨を引堀に誘いこみ、そこを叉手網を使って捕らえることになる。この時、鴨の数を数えて捕り手に合図を出すのは、鷹匠の役目ということであった。以前は、叉手（さで）網で捕らえそこなった鴨を、鷹匠が鷹で捕らえていたという。

今回の見学会では、鴨を監視するための「大覗」（おおのぞき）などの施設を具に見ることができ、実際の狩猟に思いをはせることができた。今後は、紀州藩や幕府の鷹場と鴨場の関係性について、この科研の中で検討することができればと考えている。

新浜鴨場見学参加記

福田　千鶴

新浜鴨場は、千葉県市川市にあり、もとは東京湾の干潟の一部であった。現在は、JR京葉線の市川塩浜駅と東西線の行徳駅の間に位置する。昭和 45 年 5 月に新浜鴨場を含む約 83 万ヘクタールが行徳緑地保全区域に指定され、昭和 51 年1月には「市川野鳥の楽園」が造成され、鳥類の保護地区とされた。新浜鴨場は埼玉鴨場と同様に宮
内庁の管理のもとにあり、約 13 万ヘクタールの広大な敷地のなかに、元溜と呼ばれる池、御泉水、食堂などの諸施設がある。

宮内庁鴨場は平成 28 年度より所在する鴨場の市民を対象に公開してきたが、今年度からは市民以外にも公開することになった。幸運にも当研究会の申請は、2倍以上の倍率のなかから当選を勝ち取り、9月 25 日（水）午後の部への参加となった。参加者は、東幸代・伊藤昭弘・榎森進・大坪舞・兼平賢治・中澤克昭・中野渡一耕・福田千鶴・丸山大輝・渡部浩二（五十音順）の 10 名である。宮内庁職員の説明によれば、鴨場は鷹場の一つの形態であり、獲物の鴨を傷つけずに捕獲する伝統的な狩猟法で、江戸時代から続けられているとのことだった。現在も鷹師長・鷹師・鷹匠という職階のもとで鴨場は管理されているとのことで、これも鴨場が鷹場であったことの名残といえよう。

見学会では、まず映像を視聴して基礎知識を得たあとに、実際の鴨場見学となった。建物を出た正面に御泉水の優美な景色が広がり、その左手に野鳥の鴨等が飛来する元溜がある。その周囲は竹藪で覆われ、「大覗」の覗き穴以外からは池が見えない構造となっており、野鳥がヒトの姿に臆することなく安全に暮らすことのできる環境であることがよくわかった。また、鴨よりやや大きいのが囮の家鴨（あひる）だということだったが、素人目には鴨と家鴨の区別はほとんどつかなかった。呼び音に馴らされた囮の家鴨に好奇心の旺盛な数羽の鴨があとに続き、それに連動して鴨たちが引堀（長さ 15～20m、幅2mの水路）に入ってきたところを待ち受ける。家鴨は飛べないので、鴨だけが驚いて飛び立ち、それを叉手網を持った 10 人が次々に捕まえる。捕獲した鴨は生態調査等を済ませたあと、御泉水に放鳥されるとのことだった。

見学当日は雨天が心配されたものの、無事に見学会を終えることができた。貴重な見学をご許可いただき、また数々の質問等に丁寧にご対応いただいた宮内庁式部職の皆様にお礼を申し上げます。

＊以上の記事は、宮内庁の掲載許可をとっています。よって、無断転載を禁止します。

編集後記

Phot by Chizuru Fukuda
2018 年 9 月 8 日　高麗鷹房のハヤブサとオオタカを据えるパク鷹師

今年の夏は、酷暑・地震・台風と相次ぐ天変地異に心を痛める日々でした。韓国訪問も、まさかの関西空港閉鎖という緊急事態に振り回されました。その惨事のため、韓国調査に参加できなかったメンバーには、本当に残念なことだったと存じます。とはいえ、無事に韓国調査を終え、また有志者による宮内庁鴨場見学も充実した貴重な体験を得ることができました。宮内庁鴨場の撮影写真は、個人利用のみということで掲載できないのが残念ですが、また来年も機会を設けるとのことですので、ぜひこれらの機会を利用して見学会へご参加いただければ幸いです。

なお、報告記・参加記をご執筆いただいた丸山大輝さん、山﨑久登さん、ありがとうございました（ち）。

鷹・鷹場・環境 NEWS　VOL.5　2018 年 10 月 1 日発行　鷹・鷹場・環境研究会編集・刊行

〒819-0395　福岡市西区元岡 744　九州大学基幹教育院福田研究室　TEL：092-802-6019